五郎丸に影響与えた指導者の部下育成術（第3回）

「口下手でもいいじゃないか」――短所に光を当てる

2016.02.17

ラグビーワールドカップの大活躍で話題となった五郎丸歩選手。選手として基礎を固めた早稲田大学ラグビー蹴球部時代の監督が中竹竜二氏だ。五郎丸選手は、今でも影響を受けた指導者として中竹氏の名前を挙げる。中竹氏に結果を出す部下への指導法を学ぼう。

今回は「部下に気づきを与える」言葉のかけ方の第2回。前回、強烈な「らしさ」、つまりスタイルを生かすことが大事だと説明した。しかし、そもそも部下のスタイルをどう見つければいいのか。そこに悩む上司もいるだろう。その1つの解は、「短所に光を当てること」だと思う。

「鈍足なんだから、速く走ろうとするな」。これは、私が自分自身に言い聞かせてきた言葉だ。小学校でラグビーを始め、大学まで選手を続けたが、プレーヤーとして大活躍できたかというと残念ながらそうではない。

その原因の1つは、私の一番のウィークポイントである足の遅さだ。最も速かった大学の現役時代で、50メートル7秒6。フォワードのフランカーというポジションにおいては致命的な数字だった。とはいえ、いくら頑張ってもそう簡単に足は速くならない。そして、必死に頑張って0.1秒、0.2秒縮めたところで、プレーのパフォーマンスがグンと上がるわけではなかった。そこで、私はどうしたか。鈍足をカバーする方法を必死で考えたのである。

フランカーというポジション、特にゲーム中のあらゆる場面を洗い出した。そして、その中で俊足であることが求められる割合を計算してみた。すると、80分間、15人でプレーするラグビーにおいて、フランカーの私が直線を50メートル走るシチュエーションはほとんどなかった。確かに瞬間的なスピードが求められる場面はあるが、そういう場面を分析すると、スタートのタイミングやゲームの流れの読み、走るコースの選択などで、鈍足を十分に補えると分かった。

短所に光を当て、ストレスから解放する… 続きを読む